



平成26年度
大阪新美術館建設準備室
連携事業報告書



大阪新美術館は、大阪市北区中之島に、平成32(2020)年度までの開館をめざしています。

平成26(2014)年9月5日には「新美術館整備方針」を策定、5つの活動方針として、「収集保存や調査研究の実施」「特色ある展覧会の開催」「教育普及の実施」「さまざまな分野との連携」「交流の場の提供」を掲げました。すでに、新美術館建設準備室としていろいろな取り組みがはじまっており、なかでも、《萬年社コレクション研究調査プロジェクト》(大阪市立大学等との連携)、《インダストリアルデザイン・アーカイブス研究プロジェクト》(パナソニック株式会社、国立大学法人京都工芸繊維大学との連携)など、調査研究の領域で「さまざまな分野との連携」を開館に先駆けて進めています。

それに並んで積極的に展開しているのが、教育普及活動の領域での連携です。「美術館の外とつながる」ことにより、教育普及の新しい可能性を探る取り組みは、平成25年度に本格的にスタートしました。それは、開館後の美術館活動につながる次の2つの視点に基づいています。

1. 美術館から外へ

美術館(学芸員)が、館内に留まらず、他の施設や地域に出て、そこにある資源(人やもの、歴史、産業など)とアートをむすびつけ、新たな活動を展開すること。

2. 外から美術館へ

美術館のもつ資源(作品や人など)の新たな活用方法を、美術館の外の多様な人が発見し、実践することで、アートの楽しみを広げること。

平成26年度の事業実施にあたっては、前年度の成果と課題を踏まえ、新たな連携先の開拓、新しいプログラムの作成・実施、継続事業における内容の充実など、連携先との関係を深めるとともに、新美術館を通じたネットワークを広げることに努めました。この小冊子ではその成果を、学校、市民、こども、地域、図書館という5つのテーマに沿ってご紹介します。

平成27(2015)年度は、連携による教育普及活動が3年目を迎えるにあたり、事業内容をさらに充実させるとともに、これまでの成果を検証して、連携の第二段階へステップアップするための総括としたいと考えています。

今後も、新美術館建設準備室の連携事業にさらなるご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、参加者のみなさまや、ともに事業を企画・実施いただきました関係先のみなさまに、心よりお礼申し上げます。

大阪新美術館建設準備室

目 次

学校×新美	2
市民×新美	5
こども×新美	7
地域×新美	9
図書館×新美	11
外部研修生の声	12
「新しい美術館のめざす普及活動～これまでの連携事業を振り返る」	13

学校 School × 新美

ね
らい

学校教育における美術館の活用について、実践を通じて
さまざまな可能性を探ると同時に、美術・美術館の持つ
教育的な効果に対する認知を教育関係者に広めること

学校教員向けワークショップ 「見たことのない私」の描き方

図工・美術のカリキュラムに取り入れられつつある現代美術の多様な表現を教育現場に紹介するため、現在活躍中の美術作家を講師に迎え、その制作を追体験するワークショップ。小中高等学校・支援学校の教員が、講師の制作手法やコンセプトに基づいたプログラムに沿って作品を制作し、鑑賞することを通じて、現代美術のもつ斬新な発想や柔軟な考え方を体感した。

2014年7月31日（木） 大阪市立九条南小学校 多目的室

8月4日（月） 大阪市立大宮小学校 多目的室

8月5日（火） 大阪市立大宮小学校 多目的室 ※同内容で3回実施

講 師：彦坂敏昭（美術作家）

参 加 者：84名

後 援：大阪市教育委員会、大阪府教育委員会、堺市教育委員会、大阪教育大学

助 成：一般財団法人 地域創造

講師の作品とその背景にある考え方などについての説明を聞いた後、自分の顔写真を利用しながらも、写真とは全く異なる自画像を制作した。最終的な完成品の例や手順の全体を意図的にふせたまま、講師から次々に出される指示により多くの段階を経ながらワークショップは進行。5秒で自分の輪郭線を描く、目隠しをして目を描きこむなど思いもよらぬ指示に、時に戸惑い、時に笑いながらも、参加者は「自分でも見たことのない自分」を完成させ、最後に参加者全員の作品を並べ、皆で鑑賞した。講師が大切にしている「解像度が低いからこそ見えてくるものがある」「できてしまった」作品を受け入れ、それを楽しむ」という考え方を体感できる内容であり、その発想や各段階の独創的な制作方法が授業に応用しやすい実践的なワークショップであった。



学校内で芸術家と児童生徒と一緒に制作を行うワークショップが近年注目されているが、芸術家が自身の制作した作品を子どもに見せて行う「鑑賞」型のワークショップはこれまでにあまりない試みである。制作中心のワークショップは時間や材料などにより制約されるが、ともに観る「鑑賞」の手法をとることで、多様な美術作家が参加の機会を得られる。また、創り手である美術作家が学校の授業に参加し、子どもや教員との対話を通して自身の表現力や感性をスキルアップすることのできるプログラムとしても構想された。参加作家は、学校教員が実施する写真画像やレプリカを使った鑑賞授業を見学した後、教員の助言・協力を得ながら自らの指導案を作成し、自身の作品を学校に持ち込んで児童を対象に鑑賞授業を行った。

①大阪市立福小学校 第3学年(1クラス 22名)

鑑賞授業1 「シャガールを知ろう」

2015年1月23日(金) 授業者：木下典子・岡嶋耕太郎(大阪市立福小学校教諭)

鑑賞授業2 「『福美術館』によこうそ！～大きい絵がやってきた～」

2月23日(月) 授業者：岸本恵美子(美術作家)

参加作家の岸本恵美子は主に抽象的な絵画を制作している。1回目の学校教員による授業では、タブレットの機能などを活用し、シャガール作品を画像で鑑賞。2回目の作家による授業では、児童と本物の作品の出会いの場とするため、教室(多目的室)を美術館に見立て、幅3m以上におよぶ自身の大型作品1点と小品数点を展示。児童は作品に近づいたり離れたりしながら鑑賞し、また素材の匂いを嗅ぐなど、視覚以外の感覚も用いて作品を体感した。



②大阪市立九条東小学校 第6学年(1クラス 32名)

鑑賞授業1 「色や形に目を向けて～シャガールの世界を楽しもう」

2015年1月28日(水) 授業者：吉野夕香里(大阪市立九条東小学校教諭)

鑑賞授業2 「形に注目して、この石はどこだ」

2月18日(水) 授業者：崎川真璃絵(美術作家)

参加作家の崎川真璃絵は、主としてパフォーマンスによる作品制作を行っている。1回目の学校教員による授業では、アートカードを利用。複数の作品を、その雰囲気によって季節ごとにグループ分けする作業などを行い、色を中心にシャガールの作品を鑑賞した。2回目の作家による授業では、作家によるパフォーマンスを記録写真の鑑賞により学び、同様の行為(石の形を観察して、身体にフィットするところに貼り付ける)を児童が班ごとに体験。最後にその様子を撮影した写真を全員で鑑賞した。



成果と課題

昨年度より実施している教員向けワークショップは、本年度も講師である美術作家の斬新な発想や考え方に対する興味、関心を示す声や共感を表わす感想が多く聞かれ、教育活動と美術・美術館のつながりに対する教員の認識を高めることへの効果が認められた。一方、ワークショップで体験したことを再構成なしにそのまま授業で実施できる内容を求める声もあり、ワークショップ本来の趣旨のさらなる周知や、授業応用のための説明に課題を残した。鑑賞ワークショップは新たな試みであるが、児童は本物の作品に多くの刺激を受け、美術作家にとっても自作を見直す機会となり、双方に得るもののある内容となった。学校と美術館の連携の一つの可能性を示したと言えよう。今後、より効果的なプログラムとするため、学校や作家に対する具体的なフォローの方法を検討していきたい。

国語科における美術作品の活用(協力事業)

大阪教育大学附属平野中学校および附属高等学校平野校舎の授業研究に協力し、国語科における美術作品活用の機会を得た。教師が授業でめざす目的に従って、具象、抽象、平面、立体など、コレクションのさまざまな作品の中からどれを題材とするかを検討し、その画像を提供した。また、学芸員が中学校と高等学校に赴き、講義形式の授業を1時間ずつ担当した。今回の授業で、美術科だけではなく、国語科においても美術作品が創造力や表現力を引き出すための有効なツールであることが確認でき、また、生徒たちに大阪新美術館のコレクションを知つてもらう機会ともなった。

中学校「『その絵、どんな絵?』—絵画をことばで説明する—」

授業者：大阪教育大学附属平野中学校 小村典央

対象：中学1年生（3クラス 119名）

内容（全11時限）

- ① 絵画(岸田劉生《静物(湯呑と茶碗と林檎三つ)》)の説明文を、個々に400字以内で書く。
- ② 絵画(5点の具象絵画のうち1点)の説明文を、個々に800字以内で書く。
- ③ ②で書いた説明文をグループで読み合って整理した後、グループとしての説明文を書く。
- ④ グループで書いた説明文を、口頭で発表する。

美術館の役割：

作品画像を提供するとともに、学芸員の講義(3時限目)を実施。絵画の見方について、主題、構図、配置、描写などいくつかのポイントに従って解説した。

主観的な言葉や表現ができるだけ使わず、客観的に説明することを目標としたこの授業では、始めは作品の中心部分しか記述できない生徒が多くいたが、最終発表では部分と全体、内容と表現など、作品の様々な要素を記述できるようになっていた。生徒たちは、表現力と共に絵画を見る目も養われたと言えよう。



岸田劉生《静物 (湯呑と茶碗と林檎三つ)》

高等学校「絵画を味わう—物語を紡ぐ—」

授業者：大阪教育大学附属高等学校平野校舎 琢磨昌一

対象：高校2年生（3クラス 119名）

内容（全7時限）

- ① 絵画を題材とした文章として、作品解説、詩、物語の3種類を紹介し、表現の違いを学ぶ。
- ② グループ毎に、題材とする作品を3点選び、キーワードを挙げて物語の方向性を検討する。
- ③ グループで1つの物語を作る。(3000字程度)
- ④ 朗読会

美術館の役割：

作品画像(絵画、彫刻、写真、デザイン作品30点)を提供するとともに、学芸員の講義(1時限目)を実施。絵画にまつわる文章表現の一つとして、作品解説文を絵画の見方とともに紹介した。

生徒には作者・作品名を伏せて作品を提示したため、思いがけない組み合わせが生まれたり、難しいと予想していた抽象画が選ばれたり、非常にユニークな作品選択がなされた。モチーフから想像される物語だけでなく、作品の視点から主人公の心理を創作したり、3点に共通する色彩的特徴から物語を紡いだりしたグループもあった。いずれの物語からも、視覚芸術による創造力の刺激が強く実感された。

市民 People × 新美



「見る側」から「つくる側」へ —— “展覧会をつくる”
というアートの新たな楽しみ方を通じて、美術館とより
深く積極的に関わる機会を、市民に提供すること

市民キュレーターワークショップ

共催：大阪府立江之子島文化芸術創造センター 助成：一般財団法人 地域創造

公募による市民キュレーターが、約 7,800 点におよぶ大阪府 20 世紀美術コレクションの中から作品を選んで展覧会を開催した。コンセプトや空間配置を考え、章パネルの原稿執筆や広報も手掛けるなど、展覧会づくりのさまざまなプロセスを体験。多様な経歴や立場の市民キュレーターによる展示は、それぞれが個性豊かで、新鮮な切り口が見られた。今年度は夏季と冬季の 2 回、本ワークショップを実施。各回 5 名、合わせて 10 名が参加した。

ワークショップ内容

夏季：2014 年 6 月 21 日（土）より実施【写真 a, d, f, j】

冬季：2014 年 11 月 15 日（土）より実施【写真 b, c, e, g, h, i】

●オリエンテーション（夏季 6/21・冬季 11/15）

市民キュレーターと学芸員等との顔合わせの後、コレクションの概説、展示室の担当箇所の割り振り、展覧会メインタイトルの検討など、ワークショップを始める上での情報共有や話し合いが行われた。



●コンセプト作り、出品作品選び

市民キュレーターが学芸員と話し合いながら、コレクションについて上記の概説からさらに詳しく調べ、出品作品を選定（1 人当たり 10 点前後）。あわせて展示コンセプトも考えた。



●中間発表（夏季 7/12・冬季 12/6）

この日までに固めた出品作品や展示コンセプトの案を、市民キュレーターがプレゼンテーション。ブラッシュアップのための意見交換もなされた。

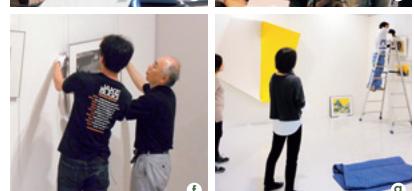


●展示内容、出品作品、展示タイトルの決定、パネル原稿の作成、展覧会広報（チラシ配布、ウェブ媒体での情報発信など）



●作品展示作業（夏季 8/17-18・冬季 2015/1/12）

美術品専門のプロの作業員とともに、作品を展示。市民キュレーターも、作品の位置決めをはじめ、様々な作業に携わった。



●展覧会の開催（→次頁に詳細）

ワークショップの成果発表の場である、展覧会。展覧会期中には、展覧会場で市民キュレーターが自らの展示について語る「ギャラリートーク」を実施。



●作品撤去作業、振り返り（夏季 8/31・冬季 2015/1/25）

作品を撤去した後、ワークショップの締めくくりとして、これまでの活動を振り返り、感想や反省点を述べ合うミーティングが行われた。



展覧会（夏季）

「アートでつむぐ、5つのストーリー
—5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展—」
会期：2014年8月19日（火）～8月30日（土）
会場：大阪府立江之子島文化芸術創造センター ルーム1
展示作品総数：47点
ギャラリートーク：8月24日（日）

●展示のタイトル／企画した市民キュレーター

私のart of living～どうぞ、アートを楽しみにうちへいらしてください～
企画：上野美子

ある街角

企画：中出祥二

本当にいいものを選ぶ～アートの中に見る、

人にやさしい「もの」や「こと」～
企画：林紀行

木いろ～自然とエネルギー～

企画：山本すみれ

duet

企画：吉村淳二



展覧会（冬季）

「open your box
—5人の市民キュレーターによる、大阪府20世紀美術コレクション展—」
会期：2015年1月13日（火）～1月24日（土）
会場：大阪府立江之子島文化芸術創造センター ルーム1
展示作品総数：62点
ギャラリートーク：1月17日（土）

●展示のタイトル／企画した市民キュレーター

世界はとてもやっかいだ でも そう捨てたものではない
企画：有賀千洋

『素材』と『技法』を楽しむ“あつまりの作品”

～じっくりじっくり見てみよう！～

企画：上林恭子

Dance

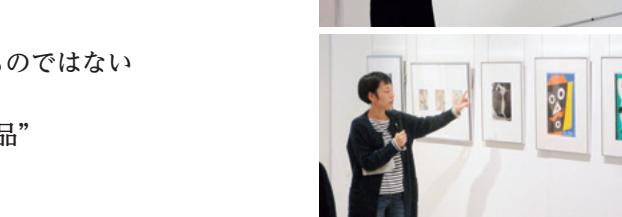
企画：木村優介

Yellow -心を照らす 美の灯り-

企画：永田由佳子

空想アンソロジー

企画：野口菜々



成 果 と 課 題

今年度は、展覧会づくりを通して特定の作家や作品への関心が深まったという声を参加者から多くいただき、美術に対する「学び」を促す効果を、本事業で改めて実感した。ワークショップへの参加者はごく少数に限られることから、本事業の成果は、展覧会という形でより多くの人々に見てもらうことが重要である。今年度は、展覧会タイトルやチラシデザインの見直し、SNSの活用に努めたこともあり、昨年度より展覧会の来館者数（1日当たり）は増えたが、集客に改善の余地はまだ多い。3年目を終えた本事業からは、21名の市民キュレーターが誕生したが、彼ら「先輩キュレーター」の層の厚さを今後の活動にどう活かすかも課題である。

アートフォーラム 〈こどもとアート〉の現場を考える

2014年8月8日(金)、11月1日(土)

共催・会場：大阪府立江之子島文化芸術創造センター

企画・運営：キッズプラザ大阪

助成：一般財団法人 地域創造

本アートフォーラムは、美術作品や学芸員という資源を有する文化施設の活用方法を新たな視点から探る目的で、外部機関による企画提案を受けて実施したものである。こどもを対象とするワークショップと大人を対象としたトーク＆ディスカッションの2部で構成。ワークショップでは、こどもたちが対話型鑑賞を体験し、それに基づく創作表現を行った。トーク＆ディスカッションでは、ゲストによる事例報告と参加者全員によるディスカッションを通じて、〈こども〉や〈アート〉に関わるさまざまな立場の人々が情報交換と交流を行い、次の活動への刺激を得る機会とした。

【こども対象】ワークショップ「キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム」(8月8日)

参加者：21名(小学1～6年生)

参加したこどもたちを学年ごとに4つのグループに分け、本物の美術作品(大阪府20世紀美術コレクション)を使った対話型鑑賞を実施。作品をよく観察し、想像力を高めることに加え、他のこどもの発言を聞くことで、さらに作品への興味や関心が深まるこことをめざした。後半では、鑑賞で得た刺激や心の動きが創作表現を通してこどもたちの記憶に残ることをねらい、作品の複製を用いて絵本またはワークシートを制作した。すべての過程で、1人のナビゲーターが1グループを担当。ひとりひとりに寄り添いながらワークショップを進行した。

●内 容

- ①グループごとに自己紹介
- ②たてもの探検…黒い枠のフレームを持ちながら建物を探検。フレームで階段や手すり、壁の一部などを切り取りながら、物事を注意深く観察する練習をした。
- ③作品のない空間鑑賞…何も飾られていない空間で、寝ころんやり、歩いて広さを感じたりするなど、心を落ちつかせ、作品と向きあうための準備の時間。
- ④作品の対話型鑑賞…グループごとに、1つの空間で1つの作品に向かい、対話を重ねながら作品を鑑賞した。他のこどもの発言を聞きながらさらによく見ることで、こどもたちの中で作品の捉え方がみるみるうちに変化していく様子がうかがえた。
- ⑤ワークシート／絵本づくり…作品のコピーを使い、コラージュする方法で、オリジナルのワークシートまたは絵本を制作。
- ⑥発表…自分たちが考えたこと、工夫したこと 등을伝えることにチャレンジ。
- ⑦学芸員による作品解説…それぞれのグループが鑑賞した4つの作品について、作者や制作の背景など、学芸員の解説を全員で聞いた。こどもたちの作品への関心がさらに深まった様子。



おとな対象 トーク＆ディスカッション

「こどもとアートと現場と大人の… 真剣で楽しい関係」(11月1日)

参加者：20名

「なぜ、こどもとアートを出会わせることが求められるのか？」〈こどもとアート〉に関わる中で、誰もが一度は突き当たる本質的な疑問。今回は、この点に高い意識をもって〈こどもとアート〉の現場に立つ2名をゲストとして招き、考え方や活動事例を紹介。続いてのディスカッションでも、テーマを実践的なものではなく参加者全員が興味や関心をもつ本質的なものに設定し、活発な議論の展開を図った。

●内 容

①ゲストトーク

▶高橋 綾(大阪大学特任研究員・カフェフィロ副代表)

「アート、表現、てつなぐを楽しむ」

…こどもたちが美術作品の前で哲学者と一緒に考え、言葉や身体で表現するワークショップ「こどものてつなぐ美術館」を実践する高橋さん。鑑賞から表現へとこどもたちが想像力を広げていく様子を紹介しながら、ワークショップの中で大切にしていること、アートとつなぐとの共通性などについてお話をいただいた。



▶今村 源(現代美術家)

「こどもとつながるアーティストの眼差し」

…自身のこども時代の記憶から生まれた作品や、小学校で実施したワークショップなどを紹介しながら、こどもは触覚を通じてさまざまな世界を感じていること、その開かれた感性は大人になるに従って引き出しの中にしまい込まれてしまうが、美術を通して引き出しを開けやすくできるのでは、という考えをお話をいただいた。



②ワークショップ（8月8日）の成果報告…こどもたちが制作したワークシート／絵本と対話型鑑賞の様子を映像で紹介。

③グループディスカッション…次の2つのテーマによるグループ討議。ゲストも輪に加わり、熱心な話し合いの様子が見られた。

テーマ1 「あたらめて…考えてみたい！なぜ？こどもと(に)アートなのでしょうか？」

テーマ2 「こどもとアートをつなげるために自分ができること、したいこと」

④シェアリング…各グループで話し合ったことを共有。ディスカッションテーマについて、学校教育、こどもに関わる現場、美術館関係など、参加者それぞれの立場からさまざまに述べられた意見を振りかえるとともに、こどもとアートが出会う場で感じる手ごたえや、こどもをとりまく現状への危惧についても意見があがった。



成 果 と 課 題

ワークショップにおいては、本物の美術作品がもつ力だけでなく、ナビゲーターを介したこどもたち同士の対話が感性を刺激し、豊かな表現へと結びしていく様子がうかがえた。また、ナビゲーターのきめ細かいフォローがこどもたちの創造力を十分に引き出しており、「こどもの専門家」である外部機関と連携する長所が発揮されたといえる。トーク＆ディスカッションでは、ゲストによる意義深いトークや、さまざまな立場の人人が意見を交換する場を通じて、参加者それぞれが新たな気付きを得る機会とすることことができた。迷いが消えた、英気を養えたという感想も聞かれた。〈こども〉や〈アート〉に関わっている、あるいは関わりたいと考える人々が積極的につながる場を、これからも創出していくことが必要である。

地域 Region × 新美

ね
らい

アートを“日常”に——こどもたちがアートに触れる機会を提供するとともに、地域の人々にアートや美術館の可能性を知ってもらうこと。地域の資源にアートという光を当てて新たな魅力を発掘し、ワークショップなどを通して広めること

区役所連携事業(地域×新美×こども プロジェクト) 助成:一般財団法人 地域創造

新美術館建設準備室が平成25(2013)年度より取り組む、新しい形のアートリーチ活動。今年度は港区および城東区と連携。港区では“港町 築港・天保山地区の風景”、城東区では“猿楽”というそれぞれの地域資源とアートをかけあわせ、2つの特色あるワークショップを企画・実施した。区役所を通じて、地域の中学校や市民団体等とも連携することができた。

「親子でみつけ♪世界でひとつのフォトグラフ～ピンホールカメラ・ワークショップ」

2014年10月25日(土)

会場: 大阪市立築港中学校

共同主催: 大阪市港区役所

協力: 大阪市立築港中学校、海岸通ギャラリー・CASO、あかマルシェ2014実行委員会、
築港・天保山にぎわいまちづくり実行委員会

講師: 岡田可斗子(キッズプラザ大阪 ミュージアムエデュケーター)
寺嶋智恵子(あかマルシェ事務局 写真作家)

参加者: 小学生(1~4年生)とその保護者19名、大阪市立大正中央中学校美術部生徒

築港中学校との連携 一般参加のワークショップに先立ち、大阪市立築港中学校美術部生徒を対象に事前ワークショップを実施(9月6日)。本番当日には生徒たちが参加者のカメラ作りや港区の風景の発見をサポートした。

●内 容

「海・川・港町・夕日」のまちとして魅力発信に取り組んでいる港区。今回は、港区の風景の新たな魅力を発見する手段として、ピンホールカメラ・ワークショップを実施した。カメラ本体も身近な材料で手作りし、ものづくりの楽しさも体験できる機会とした。

①“写真”についてのお話…最も単純なカメラであるピンホールカメラの仕組みや、ピンホールを通して撮影された写真的特徴について、講師より作品を紹介しながら解説。

②ピンホールカメラ作り…制作方法をスライドで紹介しながら、それぞれが持参した紙箱を使ってカメラ作り。最も重要なシャッターは、中学生のサポートのもと、特に時間をかけて制作。

③印画紙の取り付け…暗室状態でカメラに印画紙をセット。

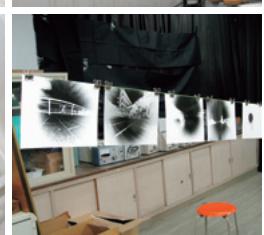
④港区の風景探し…会場近くの築港エリアや港住吉神社にて、お気に入りの風景を親子で探し、シャッターを約30秒開放して撮影。

⑤ネガの現像…再び暗室状態とした中で、撮影した印画紙を現像液に浸して現像。像が浮かび上がってくる様子に、こどもたちからは歓声が上がった。

⑥鑑賞…自然条件や偶然が大きく作用するピンホールカメラ。箱の形状やシャッター解放時間がどう影響したかなど、講師の解説を聞きながら、できあがったネガを全員で鑑賞。

作品展示

参加者が撮影したネガは、主催者にてポジに現像して額装し、海岸通ギャラリー・CASOで展示した。(11月3日~9日)



「こども猿楽 水の祭り～工作と身体表現ワークショップ」

2014年11月15日(土)

会 場：大阪市立関目東小学校

共同主催：城東区ゆめ～まち～未来会議

協 力：大阪市城東区役所

講 師：阿部未奈子(身体表現活動家)

高柳有紀子(大阪新美術館建設準備室 学芸員)

参 加 者：26名(小学1～6年生)

●内 容

城東区は、能や狂言の原型である猿楽の座の一つ、榎並猿楽の発祥の地である。今回は、こどもたちが猿楽を知り、地域の歴史に親しみきっかけとして、お面を被って身体表現を行うワークショップを実施。大阪は水の都であり、こどもにとっても川はなじみ深いことから、テーマを“川の精霊”として、こどもたちが“日常の精霊”と“怒りの精霊”を演じ分ける構成とした。

①導入～キーワード集め…「川にはどんな生き物がいる?」「川はどんな音がする?」などとこどもたちに問い合わせ、川や精霊についてのイメージをふくらませた。



②オリジナルのお面作り…土台にビーズ、木の葉、毛糸など、さまざまな素材を貼り付け、オリジナルのお面を制作。“日常の精霊(青または緑)”、“怒りの精霊(赤)”の2種類をそれぞれ作った。



③身体表現の準備…あらかじめ用意した“水の祭りのかけ声”と振り付けを全員で練習。



④みんなで川の精霊に変身!!…シナリオ[いつもの川→悪い大人登場(川を汚す)→精霊の苦しみ→怒り→清め(光による浄化)]に従って、こどもたちが川の精霊を演じた。スタッフの大人は、悪い大人を演じたり、楽器を演奏したりして参加。



⑤振り返り…城東区に猿楽という芸能があったこと、川にごみを捨ててはいけないことなどを語る講師の言葉を、こどもたちも十分理解出来た様子。「もう一回やりたい!」という声も上がった。

成 果 と 課 題

今回の連携がなければ結びつくことがなかったかもしれない、地域の素材や人材と美術館やアーティストをつなげ、さまざまな立場の関係者とともに一つのワークショップをつくりあげたことは、大きな一步と考える。地域にはいろいろな魅力と可能性が存在していることを、地域の担当者も美術館側も強く実感することができた。また、実施までのプロセスを共有することで、美術館と地域の新たなネットワークを築くことができたのも成果である。今は、ようやく最初の種まきが終わった状況である。いかにして継続し、地域におけるアートとその担い手を増やしていくかが今後の課題といえる。

図書館 Library × 新美 ねらい

図書館と美術館の専門性が相乗効果を発揮する連携のあり方を探すこと。さまざまな人が集まる場所に、新しい「アートの場」を創出すること

新美術館×図書館 わくわくコラボ 2014 共同主催：大阪市立図書館

今年度で3回目となる図書館との連携では、中央図書館と地域館2館からの提案により、各館の特色を活かしたテーマについて、美術館学芸員が講師として参加する講座と関連書籍展示を企画。図書館司書と学芸員が積極的に関わり合い、よりステップアップした連携を実現した。また、各機会が、さまざまな人の集まる開かれた場となるよう、これまで以上に積極的な広報活動を行い、参加者の増加を図った。

第1回 「観る本？読む美術！ ブックデザインの愉しみ」

2015年2月7日(土) 大阪市立中央図書館 5階中会議室

講 師：植木啓子(大阪新美術館建設準備室 主任学芸員)

参加者：63名

本のデザイン・装幀をテーマとした本講座では、「観る本」と「読む=使う本」の異なる美しさという視点から本の内容とデザインの調和などについて学芸員が解説。新美術館建設準備室所蔵の20世紀初頭の貴重本も会場で紹介した。同時に中央図書館の持つ自治体最大規模の豊富な蔵書から、司書が構成・選択した約180冊におよぶ関連書籍の展示(講座と同タイトル)を実施(2月6日～3月4日)。



第2回 対談「こんなところにゲイジュツが!! “まちびじゅつ”的可能性」

2015年2月11日(水・祝) 大阪市立旭区民センター小ホール

共 催：大阪市立旭区民センター

協 力：大阪市立芸術創造館、大阪市旭区役所

講 師：小原啓渡(大阪市立芸術創造館 館長)

菅谷富夫(大阪新美術館建設準備室 研究主幹)

参加者：55名



旭図書館では、区民センターや芸術創造館との複合施設内にあるという特性を活かし、新美術館建設準備室をそれらの施設ともつなぐことで、広がりのある連携を実現。区民センターを会場に、芸術創造館館長と学芸員が、パブリックアートやアートイベントをテーマとした対談を行った。また図書館内では、関連書籍による展示「こんなところにゲイジュツが!!」を実施(1月16日～3月18日)。

第3回 「平野の幽霊・日本の妖怪～大念佛寺の幽霊画から百鬼夜行絵巻まで～」

2015年2月22日(日) 大阪市立平野図書館 多目的室

講 師：阪井 明(郷土史家)

小川知子(大阪新美術館建設準備室 主任学芸員)

参加者：96名



平野区には多くの幽霊画が伝わる大念佛寺があることから、幽霊や妖怪の絵画に関する講座を実施した。はじめに図書館の招いた郷土史家が大念佛寺の幽霊画や区内の幽霊に関する伝承について紹介。その後に学芸員が、百鬼夜行絵巻を中心に日本の妖怪画を紹介し、人の世を超えた存在が絵画化される歴史的流れを解説した。また、関連書籍による展示「真冬の幽霊・妖怪」を実施(1月16日～3月18日)。

成 果 と 課 題

司書からの提案に基づく、各館や地域の特性を活かしたイベントの実現は、図書館司書と美術館学芸員の積極的な連携による、より魅力的な事業創出の第一歩となることができた。また、連携の質の向上を目指すためイベントの回数を絞ったが、総参加者数は昨年度を上回る200名以上あり、地域における「アートの場」の創出という観点からも評価できる結果となった。今後のさまざまな地域での実施に向け、館や地域の特性を活かした新たな連携の方法について継続的に検討していきたい。

外部研修生の声

平成 26 (2014) 年度の連携事業実施にあたって、3名の学生が外部研修生(インターン)として各事業に参加した。研修を終えての感想を紹介する。

山岸青葉

(市民キュレーターワークショップ／夏季) 「展覧会を作り上げる」という部分に魅力を感じ、インターンに応募させていただきましたが、「展覧会を作り上げる」というのはお客様や作者、様々なことに考慮し、安全性はもちろんのこと、お客様が見やすい展示の仕方、作者の意図に反しない展示をしなければならないこと。それらの難しさを改めて感じました。そして、展覧会を作り上げる中で、市民キュレーターそれぞれの感性や考え方につれることができたのも、このインターンで体験させていただいた大きなことだと思います。作品を鑑賞するということは、作家や学芸員その人の「考え方、感性」に触れることだと思います。そして、その「考え方、感性」を理解しようしたり、感じようとするからこそ作品を鑑賞することができると思います。今回はその大切さを根本部分から体験できました。

柴田美帆子

(学校教員向けワークショップ) 学芸員をはじめ、アーティストの方、教育委員会の方とも話ができ、得るものが多い研修となりました。美術館がアーティストと教員をつなぐということは素晴らしいことだと思います。アーティストの理念を知り、制作のプロセスを体験することによって、美術が専門でない教員でも図工教育の幅が広がり、美術専門の教員も授業に応用することができます。アーティストも自分の世界観を伝えることができ、制作プロセスを見つめ直すきっかけになります。美術館が架け橋になることで美術の輪を広げていくこの企画に関われたことを、大変嬉しく思います。

(「キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム」) 対話型鑑賞では積極的に意見が飛び出して驚きました。高学年のかどもたちは、作品の背景について予想を超えた深いところまで想像していて、子どもの持つ想像力の可能性について改めて考えさせられました。自分の考えたことを発信し、それが認められる喜びを感じられれば、子どもたちが美術に対して親しみを覚えることにつながると思います。子どもの頃に体験した感動は、大人になってから感じる美術館への敷居を低くし、結果的に来館者数につながると思うので、子ども向けのワークショップはこれからも重要なことだと感じました。

新村葉月

(親子でみっけ♪世界で一つのフォトグラフ～ピンホールカメラ・ワークショップ) 事前ワークショップや打合せ、展示作業に参加させて頂いたことで、反省点を踏まえて改善する過程を経験することができました。ワークショップの企画・進行について実際の進め方を知りたいと考えていたので、危険な作業への配慮やスムーズな進行のための工夫について学べて良かったです。また、講師の方の話の展開の仕方や問い合わせの手法を近くで見ることができたのも良い経験となりました。普段何気なく使っているカメラですが、カメラ本体や現像の仕組みを知る機会は少ないので、実際に作ることは殆ど無いと思います。子ども達だけでなく大人にとっても有意義なワークショップになったと思います。美術館と区役所の連携については、それぞれの目的がワークショップを通して達成されたと思います。特にワークショップ終了後、区役所の方が今後の展開について様々なアイデアを話しておられたのを見て、地域におけるアート活用のきっかけが生まれる機会になったと感じました。また中学生がワークショップのスタッフとして関わる経験は、美術の授業や学外授業ではできないことです。築港中学校との連携が実現したことはとても良いことだと思います。

新しい美術館のめざす普及活動～これまでの連携事業を振り返る

高柳有紀子

大阪新美術館建設準備室は、大阪市立近代美術館建設準備室として平成2(1990)年に開設された[平成25(2013)年4月1日より改称]。これまで市内の美術館・博物館を中心に60回以上の展覧会を開催し、同時に、教育普及活動にも力を注いできた。そして平成25年度から本格的に展開しているのが、“連携”というユニークな形での普及活動である。ここでは、その経緯を簡単に振り返ってみたい。

連携事業に取り組むきっかけは、平成24(2012)年に開催した展覧会「ザ・大阪ベストアート展」^(注)であった。リクエスト投票により展示作品を決定するという、“市民参加”を強く打ち出したこの展覧会では、関連企画においてもそれまでにない仕掛けを試みた。市民連携によって展覧会を企画・実施する「市民キュレーターワークショップ」と、学芸員が美術館から出て地域図書館と連携する連続講座である。また、同時期に別方向からの契機となったのが、同年10月の大阪府立江之子島文化芸術創造センター（以下enoco）のオープンである。新美術館とenocoは、大阪府、市の文化施設として、将来的な市民サービスの役割分担や、それぞれの機能を活かした新たな文化・教育・人的交流サービスの確立をみすえ、当初から連携を模索してきた。その中で試行的に実施したのが「アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える」である。

この時期に集中的に経験した、外部の組織や人々と正面から向き合い一緒にプログラムを創りあげる作業は、予想を超えた成果と様々な発見をもたらした。「市民キュレーターワークショップ」を通じて認識したのは、アート事業に主体的に関わる熱心な市民の存在であり、それまで“受け手”だった鑑賞者が“作り手”になることで生みだされる新鮮な発想である。展覧会作りの経験のない一般の人が、限られた時間でどの程度企画内容を深められるのか、一抹の不安がなかったわけではない。しかしそれは全くの杞憂だった。企画者個々の視点や想いがストレートに反映された展覧会は、作品が斬新に組み合され、学芸員の企画するものとは別種の、魅力的なものとなっていたのである。

「アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える」もまた、外からの新しい視点が美術館を活性化させる可能性を示すものとなった。新美術館とenocoがまずは〈こども〉に関わる人々の情報交換と交流の拠点をめざすこととし、こどもを対象としたワークショップと、〈こども〉や〈アート〉に興味・関心のある大人を対象としたディスカッションからなるフォーラムを企画した。その中で、さらにNPO法人cobonとの連携が実現し、三者の協働で、美術作品や学芸員などの美術館資源を活かすこども向けワークショップ「みんなで美術館をつくってみよう」が実現したのである。

この時の成功を受け、「市民キュレーターワークショップ」と「アートフォーラム〈こどもとアート〉の現場を考える」は、翌平成25(2013)年度に本格実施がスタート。これまでに21名の市民キュレーターが個性的な展覧会を企画・実現している。フォーラムも、こども対象のワークショップと大人対象のディスカッションの2部構成を継続。こども向け事業で実績のある外部機関との連携で、2つの新しいワークショップを生み出すとともに、ディスカッションにおいても、外部ネットワークを活用して多彩なゲストの先駆的事例を紹介しており、目標とする情報交換と交流の拠点作りが少しずつ実現している。

連携に取り組んで見えてきたこと——それは、外部の機関や人々とつながることで、“美術館のできること”が広がる可能性である。新しい視点が加わるだけでなく、それぞれの専門性を活かすことで内容の充実を図ることができるるのである。また、連携相手のネットワークを通じて、美術館の活動や情報がこれまで届かなかつた人にリーチできることも、連携のメリットである。その力を最大限に發揮するには、連携相手との信頼関係を築くことが重要だが、その気付きを得たのは、図書館との連携事業を通じてであった。

最初に展覧会の関連イベントとして市内地域図書館で連続講座を実施した際、学芸員が地域に出てアートの魅力を伝えることの必要性を認識し、地域館との連携に一定の手ごたえを得た。だが、単に場を利用する

以上にどのように連携すればよいのか、効果的なやり方を見出しかねていた。一方図書館側も、市民サービスの充実を図るという目的をもちつつ、内容については専門外ゆえ意見を言ってはいけないので、という先入観があったという。まずは連携によってどちらの目的も達せられることを確認し、図書館と美術館だからこそできることは何か、話し合いの場を持ち続けた。3年を経た現在では、美術と図書の分野で専門家ができることについて、お互いの理解が深まってきた。それは今年度の充実した企画内容が示すとおりである。

“連携”は平成25(2013)年度から普及活動の軸となり、新しい連携相手の模索も始めた。注目したのが区役所で、足がかりとして大阪市24区役所を訪問し、文化事業についてのヒアリング調査を行った。統計的な結論が得られたわけではないが、ヒアリングを経て分かったことは、どの地域にも特徴的な資源があり、その魅力発信に力を注いでいること、アートや美術館が非常に縁遠い存在である、ということである。これを受けてスタートしたのが「地域×新美×こども プロジェクト」である。アーティスト、地域の人々と一緒に地域資源を素材としたワークショップを企画・実施するこのプロジェクトは、こどもたちがアートに触れる機会を提供するとともに、それまでアートに接する機会の無かった区役所や地域の人々にアートや美術館の可能性を知ってもらうことも目的としている。これまで、東成区、港区、城東区の3区に、地域色に染まった3つのワークショップが誕生した。完成に向かって順調に進んだものばかりではないが、地域資源の活用を一緒に考え、アーティストの創造力に直接触れることで、関わった人々の意識が変化する手ごたえを感じている。

学校との連携も、鑑賞の機会やプログラムの提供から連携を軸としたものにシフトしてきている。平成25(2013)年度から、直接つながりにくいアーティストと学校の橋渡しを実験的に行っており、教員のための実習型のワークショップと、アーティストによるこどもを対象とした鑑賞授業を学校で実施して、一定の成果を挙げている。

この様な経過により、現在では以下の点を連携事業のねらいとしている。一つは、美術館に求められる多岐にわたる機能を果たすため、他の専門領域の人材・知識・経験を積極的に取り入れること。そして、市民自らアートの楽しみを見つけ、積極的に美術館を活用できるよう、多彩なプログラムと一緒に創っていくとともに、美術館に対する理解を広めることである。連携は、次の連携へつながる可能性も持っている。美術館から外へ、外から美術館へ、新しい提案や知恵、人材を循環させていく—— こうした継続の先に、アートの当事者が増え、すそ野が広がっていく未来があるのではないかと考える。

連携事業を充実させるには、どのような新しい相手と手を結ぶことができるか情報を収集し、柔軟なアイディアを持つことや、プロセスを共有する中でお互いを理解することに努め、信頼関係を築くことが重要であると感じている。また、美術館をめぐる状況を客観的に理解することも必要であろう。残念ながら、美術館はまだ多くの人にとって縁遠い存在であるようだ。他領域で活動する人々の眼を通して、「美術館の常識」を見つめなおすとともに、外部のネットワークを通じて、アートに出会ったことがない人にも私たちが近付けることを意識していきたいと思う。

大阪新美術館は、その活動内容を様々な人と一緒に充実させていく性質の美術館である。今年度から、外部研修生のフレッシュな力も普及活動に加わった。色々な立場の人が積極的に関わり、普及活動についてともに考えるあり方を、これからも求めて行きたいと考えている。

(大阪新美術館建設準備室 学芸員)

(注) 「ザ・大阪ベストアート展——府&市モダンアートコレクションから——」[平成24(2012)年9月15日～11月25日、大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室、主催：大阪市、大阪府、読売新聞社]コレクションの100点の候補作品からリクエスト投票による上位50点を展示。8371人から20779票が集まった。



大阪新美術館建設準備室特別ウェブサイト
アートリップミュージアム

「美術の世界を旅しよう」をコンセプトに、
コレクションのハイライト作品をいろんな角度から紹介!
<http://www.city.osaka.lg.jp/contents/wdu120/artrip/>

平成26年度
大阪新美術館建設準備室 連携事業報告書

編集・発行 大阪新美術館建設準備室
〒553-0005 大阪市福島区野田1-1-86-8階
大阪市経済戦略局文化部内
TEL : 06-6469-5189 FAX : 06-6469-3897
助 成 一般財団法人 地域創造
発行日 平成27(2015)年3月27日
印 刷 大阪書籍印刷株式会社